類義表現の例文分析において言語化される例文の意味内容

―使用される日本語表現が示唆する例文分析の傾向―

坂　口　和　寛

要　旨

非教師の日本語母語話者に調査を行い，類義表現対の例文分析において叙述される例文の意味内容について明らかにした。類義表現分析の成否から調査対象者を二群に分け，調査で得た例文分析の記述から各群に特徴的な日本語表現をテキストマイニングの手法で抽出し，例文分析の内容や手続きに見られる傾向を探った。類義表現対の弁別的な意味特徴が説明できている調査対象者群は，例文の行為主体に焦点を当てて具体的に描写する傾向がある。また，背景的事象を補足しつつ例文の構成に沿って詳述するというボトムアップ型の例文分析がなされていた。一方，類義表現分析の不十分な調査協力者群は，事物の状態を中心に例文について抽象的に描写する傾向が窺える。さらに，例文が表す事態などを意訳的に説明するトップダウン型の例文分析がなされている。また，メタ言語の使用が多く，例文分析において例文の言語的側面に焦点化する傾向も指摘できる。

キーワード：類義表現分析，例文分析，日本語母語話者，テキストマイニング

1．研究の背景と問題の所在

第二言語の指導および学習において例文は重要な補助ツールであり，文法項目や語彙に関する効果的な説明，そして正確な理解に不可欠なものである。小山内（2010）は，英語教育における「良い例文」の一条件に，「学習者がことばについて『なるほど』と納得できる」ことを挙げている。小山内によれば，文法や単語，熟語の使い方に関する規則（用法），使われるシーンや状況（場面），使い方の目的や用途（機能）という 3 点に対する学習者の「知りたい」気持ちにかみあい，「そうか」と納得できる例文が「良い例文」となる。そして，そうした例文の提示が英語教師には必要とも述べているが，「良い例文」を提示して指導項目の用法や使用場面，言語機能などを説明することは日本語教師にも不可欠な指導技術である。

日本語学習者用の教材においても例文は重要な位置付けにあり，対象レベルに関わらず例文が列挙されている。一方で，例文そのものの解説や，学習項目の特徴と関係付けた解説がない場合も多く，例文に関する理解や解釈は学習者や教師に委ねられる。しかしながら，例文自体は暗示的なものであり，たとえ「良い例文」であっても単なる提示だけでは学習者が「納得」できるとはかぎらない。そして，学習者の日本語能力上の制約を考慮すれば，例文が暗示的に表す事がらについては教師が明示的に説明することが重要となる。

日本語指導における例文の効果的利用には，小山内（2010）の言う「良い例文」が示す「用法」と「場面」,「機能」の説明が基本となろう。それらは，学習者にとって重要度の高い情報でもある。よって教師は，学習者に明示的説明ができるよう，例文が暗示する諸特徴を分析し的確に把握する必要がある。一方で，小山内の挙げる三特徴は，分析や指導での扱いやすさが必ずしも等しくない。文法規則や例文の言語的側面は抽象性が高いために分析や説明に高度な言語知識や技術を要するが，言語機能を含めた例文の意味内容や使用場面は相対的に説明しやすいと考えられる。特に，メタ言語を用いた言語的説明によって理解を促すことが困難な学習者にとっては，例文の意味内容は有用な情報だろう。例えば鴻野・高木（2016）は，初級日本語学習者への文型導入に際して「典型的な例とそれが使われる状況や場面の説明」をすることで，文型の意味や用法がわかりやすくなると述べている。以上の点を考慮すると，例文の意味内容は，日本語指導やそれに先立つ日本語分析において優先的に扱われるべきである。しかし，例文の列挙に留まる教材も多い現状では，例文の意味内容の扱いは教師の裁量に任され，分析や説明も教師個人の知識や技術，経験を基盤とした手続きに依存するところが大きい。

類義関係にある語句は学習段階とともに指導上の重要性が高まるが，その分析や指導に際して例文の分析や説明は重要で不可欠なものとなる。類義語分析過程での例文分析の手続きについて，坂口（2013）および坂口・河野（2015）は「映像化ストラテジー」の有用性を探った。映像化ストラテジーは，正用例文から想起した視覚的イメージを言語化して例文内容を説明するという手続きである。しかし，両研究が観察した例文分析過程はストラテジー使用が意識化されたもので，自然な例文分析の実態が明らかにできたわけではない。意味内容に焦点化した例文分析では，どのような事がらが言語化されるだろうか。また，後続する日本語分析の成否と関係付けて見ると，例文分析の内容にはどのような特徴があるだろうか。こうした点を探ることは，日本語の分析や指導に資する例文分析のあり方を考える一助となる。特に，非教師の日本語母語話者による自然な例文分析を観察し実態を把握することで，例文の意味内容の言語化を支える分析技術とその養成上のポイントが明らかにできるはずである。

2．研究目的

類義表現対の分析において非教師の日本語母語話者が行う例文分析を観察し，例文が表す意味内容について言語化される事がらの特徴や傾向を，例文分析記述に用いられた日本語表現から探る。特に，類義表現分析の成否という点から例文分析内容に見られる異なりや傾向を探り，日本語分析や日本語指導に資する例文分析技術を明らかにする。

3．研究方法

日本語母語話者への調査から，類義表現対の例文に関する分析と，類義表現対の分析の記述を得る。そして，例文分析の記述をテキストマイニングの手法により分析し，用いられた日本語表現から例文分析の内容を把握する。また，類義表現対の分析の成否から分析者を二

群に分け，それぞれの用いる日本語表現の特徴を探り，例文分析に見られる傾向を明らかにする。

3.1　調査の手続き

日本語指導や意識的な日本語分析の経験がない日本人大学生45名を対象とし，2015年６月と2016年１月に調査を実施した。本研究では，指導経験や明示的な日本語知識の影響を受けない例文分析の過程を観察する。日本語教育経験者の場合，学習者にとっての有用性を考慮し，文法的特徴や用法に重点を置いた例文分析がなされやすいと考えられる。こうした目的指向型の例文分析を避けるため，調査対象者には非教師の日本語母語話者を選定した。調査の手続きは以下の通りだが，このうち⑵と⑶は学習者への指導を想定していない。

⑴フェイスシートへの記入および調査内容の説明。

⑵例文分析課題：調査用紙（A4紙１枚）で個別に提示される例文の内容について考えたことを記述する（制限時間７分）。類義表現対の例文であることや後に類義表現を分析することは説明せず，例文が表わす事がらの説明のみを求める。調査用紙には，例文とともに以下のような指示文が記載されている（類義表現については後述）。

> 以下の文は，「～っぱなし」という日本語表現の例文です。文はどのようなことを表しているでしょうか。文が表していることや内容について，思いついたことや考えたことを□の中に書いてください。
> ※「～っぱなし」という日本語表現について説明する必要はありません。

⑶類義表現分析課題：⑵での記述を基に，類義表現対の意味特徴を分析する（制限時間10分）。調査用紙には，以下の指示文が記載されている。

> 「～っぱなし」と「～まま」という二つの日本語表現は，それぞれ，どのような意味を表しているでしょうか。二つの表現の違いがわかるように説明してください。
> 【注意】四つの文について説明したこと（1～4）を参考にして，特徴や違いを考えてください。

3.2　調査に用いる類義表現対と例文

中上級の学習段階で扱われることの多い類義表現「っぱなし」「まま」を取り上げ，『多様な日本語母語話者による中上級日本語表現文型例文集』（石橋玲子，凡人社，2007年）に９文ずつある例文から２文ずつ（合計４文）を無作為に選定し，例文分析課題に用いた[1)]。例文分析内容を比較し精査できるよう，統一的に例文を提示することとした。

①部屋を散らかしっぱなしにしておいてはいけません。（例文分析課題１）

②窓を開けっぱなしにして眠っていたので風邪を引いた。（例文分析課題２）

③突然の出来事だったので私はパジャマを着たまま外へ飛び出していった。（例文分析課題３）

④電車の中で立ったまま寝る人もいる。（例文分析課題４）

3.3　データの分析方法

例文分析課題４題への調査協力者45名分の記述180例を分析対象とし，例文分析に使用さ

れた日本語表現の特徴を探る。具体的には，以下のような記述がテキストデータとなる。

［例］この文は禁止を伝える文で，「部屋を散らかしっぱなしにする」という状態にしたままにしてはいけないということを表している。つまりすでに散らかった状態の部屋を片づけなさいという意味。　（例文分析課題１での調査協力者１の記述）

テキストデータに対し，WordMiner（Version1.150；日本電子計算株式会社）を用いて形態素解析を施し，構成要素[2)]を抽出した。そして，岡本（2005）を参考に，形態素解析を施したテキストデータの「リファイン」を以下の手続きで行った。

①分かち書きの修正：形態素解析での分かち書きが不適切な箇所の区切り直しや再結合。

②構成要素の置換と統合：用言や助動詞の活用形，内容が同等か類似の語句を代表的な語句に置き換えて統合。類義表現や例文の説明として内容が歪まない範囲で行う。

③重要度が低い構成要素の削除：実質的意味の希薄な構成要素を除外。

構成要素の言語単位は緩やかにとらえ，モダリティやアスペクトなどの表現は意味内容から複数語を一つの構成要素とする。手続き②では指示内容を優先し，受身や使役などのヴォイス表現も置換対象とした。③では記号や句読点，助詞や助詞相当句，助動詞「である」，接続詞など，例文分析内容の把握に対する影響が小さい語句を除外した。

また，類義表現分析の成否と関連づけて例文分析内容を精査するため，類義表現分析課題の記述を日本語教育経験者２名が10段階評価し[3)]，その評価点によって調査協力者を二群に分けた。以後，平均５点以上であった調査協力者群17名を「上位群」，平均５点未満であった28名を「下位群」とする。そして，リファイン後の構成要素を手がかりに，各群が例文分析で言語化した事がらの特徴や傾向を探ることとした。

４．結果

調査協力者の記述から抽出できた構成要素の頻度を例文分析課題ごとに調べ，上位群および下位群の例文分析において特徴的に見られる日本語表現を整理する。構成要素は例文内容の描写を示す語句と，例文などの言語的側面の説明や分析行動そのものを示すメタ言語に大別できる。このうちメタ言語としての構成要素については4.5節で４課題をまとめて扱うこととし，以下では例文内容の描写を示す構成要素に焦点を当てて結果をまとめる。

4.1　例文分析課題１での分析内容と使用された日本語表現

例文分析課題１（以下，課題１）では，例文「部屋を散らかしっぱなしにしておいてはいけません」の分析を課した。両群のテキストデータから得られた構成要素の総数（のべ数）は810個（上位群354個・下位群456個）であった。そのうち，出現数が４回（閾値４）以上のものを抽出した結果，55個の異なり構成要素が得られた（表１）。この異なり構成要素から上位群と下位群それぞれに特徴的なものを特定し，例文分析内容の傾向を把握する。具体的には，個々の異なり構成要素の総数と総構成要素数との比率を調べ，さらに群ごとに異なり構成要素数と構成要素数の比率を調べる。課題１の異なり構成要素「部屋」を例にとると，その総数81と課題１の総構成要素810の比率を調べ，さらに各群について「部屋」の数（上位群の場合は29）と構成要素数（上位群は354）の比率を調べる。こうして得た二つの

表１　例文分析課題１の異なり構成要素（閾値４）

順位	構成要素	構成要素数			順位	構成要素	構成要素数			順位	構成要素	構成要素数		
		総数	上位	下位			総数	上位	下位			総数	上位	下位
1	部屋	81	29	52	21	できる	12	8	4	41	物	6	2	4
2	散らかす	65	30	35	22	なさい	12	4	8	42	そうだ	5	2	3
3	ている	56	22	34	23	きれい	11	3	8	43	なる	5	0	5
4	する	43	22	21	24	そのまま	10	7	3	44	教える	5	0	5
5	てはいけない	34	14	20	25	イメージ	10	5	5	45	思う	5	0	5
6	まま	31	9	22	26	禁止	10	4	6	46	整理整頓	5	4	1
7	片づける	30	16	14	27	使う	10	3	7	47	続く	5	2	3
8	状態	28	12	16	28	意味	9	5	4	48	いつも	4	1	3
9	文	24	6	18	29	話者	9	2	7	49	教師	4	2	2
10	ない	22	15	7	30	出す	8	2	6	50	警告	4	4	0
11	散らかる	22	8	14	31	親	8	4	4	51	現在	4	2	2
12	ておく	19	9	10	32	表現	8	1	7	52	考える	4	1	3
13	人	19	10	9	33	悪い	7	3	4	53	受ける	4	3	1
14	放置	17	9	8	34	汚い	7	3	4	54	場合	4	4	0
15	ある	16	9	7	35	感じる	7	4	3	55	命令	4	2	2
16	言う	14	5	9	36	子ども	7	6	1					
17	ようだ	13	6	7	37	聞き手	7	0	7					
18	言葉	13	3	10	38	てある	6	5	1					
19	注意	13	7	6	39	なければいけない	6	5	1					
20	っぱなし	12	7	5	40	表す	6	3	3					

比率を比較し，より差が大きい異なり構成要素を群ごとに20個を抽出して内容の近さからまとめる。なお，以上の手続きは他の３課題にも共通する。

図１と２は，課題１の例文分析で上位群と下位群それぞれに多く見られた異なり構成要素をまとめたものである。図中の語句に添えられた括弧内の数値は上位群と下位群を合わせた当該構成要素の総数と総構成要素数の比率を表し，括弧外の数値は各群における当該構成要素の数と構成要素総数の比率を表す。また，左側の円（一重線）にある構成要素は例文内容の描写を示すもので，右側の円（二重線）は言語的説明や分析行動を示すメタ言語としての構成要素である。点線枠の構成要素は例文描写とメタ言語の双方で使用されている語句，網掛けの構成要素は例文中の語句であることを示す。

両群の例文分析では，発話を通して話者が為していることを示す構成要素が共通して見られ，上位群の「警告」「注意」と下位群の「教える」「言う」が該当する。これらは主体による行為と同時に，発話と見立てられた例文の言語機能を表している。言語機能に関係し，上位群の「なければいけない」と下位群の「なさい」「てはいけない」といったモダリティ形式は，例文が表す禁止の意図や文意を説明したり意訳したりしているものである。さらに，行為主体について上位群は部屋を散らかして叱られる主体を「人」「子ども」と描写しており，下位群は「話者」「聞き手」と対話での関係性をふまえた描写をしている。このほか両群には「っぱなし」の類義表現「まま」の使用が見られる。

一方，部屋を散らかす主体の行為については，その描写が両群で異なる。「散らかす」「放置」「整理整頓」「片づける」「ある」「っぱなし」など，部屋の状態に関与する主体の行為の描写が上位群には目立つ。アスペクト形式「てある」も，部屋の状態が主体による行為の結果であることを述べている。また，「受ける」は散らかした主体が叱られること，助動詞「ない」は片付けや整頓をしないこと，「できる」は主体の能力を説明している。このほか，「する」は多くが例文中の「散らかしっぱなしにして」の一部分である。一方の下位群には物を散らかす行為を示す「出す」と部屋や物の使用を示す「使う」があるものの行為描写は

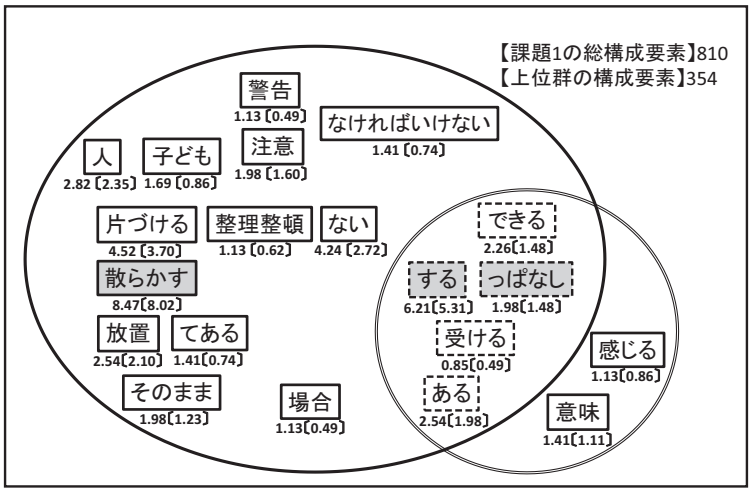

図１　上位群の例文分析記述に特徴的に見られる構成要素（例文分析課題１）

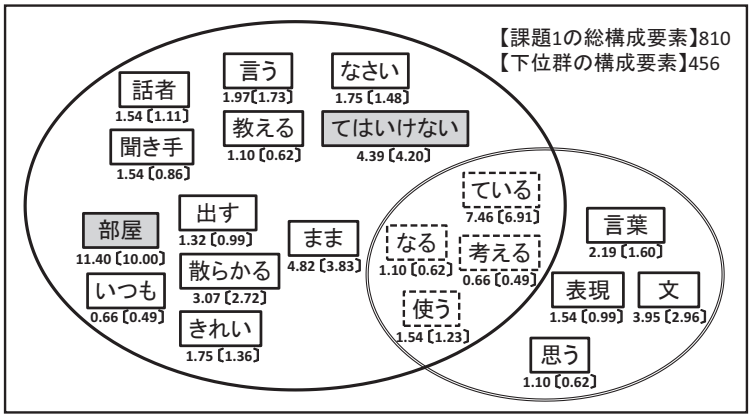

図２　下位群の例文分析記述に特徴的に見られる構成要素（例文分析課題１）

相対的に少ない。その半面，「部屋」「きれい」「散らかる」「いつも」といった部屋の状態を説明する構成要素が目立つ。同様に，「なる」も部屋の状態に関する描写で，アスペクト形式「ている」は話者の叱る行為の継続性のほかに部屋の状態を説明している。以上のほか，上位群の「場合」は特定の場面や状況への言及を表している。

4.2　例文分析課題２での分析内容と使用された日本語表現

例文分析課題２（以下，課題２）は，例文「窓を開けっぱなしにして眠っていたので風邪を引いた」の分析を課した。両群のテキストデータから得られた構成要素の総数（のべ数）は907個（上位群402個・下位群505個）であった。そのうち，閾値４以上の異なり構成要素を抽出した結果，表２にある60個が得られた。

個々の異なり構成要素の総数と総構成要素数907個との比率，さらに群ごとに異なり構成要素の数と構成要素の総数（上位群402・下位群505）の比率を調べた。そして，各群に特徴的な構成要素20個の構成要素を抽出し，内容の近い語句を配置してまとめた（図３・４）。

表２　例文分析課題２の異なり構成要素（閾値４）

順位	構成要素	構成要素数			順位	構成要素	構成要素数			順位	構成要素	構成要素数		
		総数	上位	下位			総数	上位	下位			総数	上位	下位
1	窓	89	39	50	21	表す	11	6	5	41	だろう	5	0	5
2	ている	81	44	37	22	話者	11	5	6	42	意図的	5	2	3
3	開ける	70	32	38	23	ある	10	3	7	43	意味	5	1	4
4	風邪	62	28	34	24	状態	9	3	6	44	考える	5	3	2
5	ひく	58	25	33	25	忘れる	9	6	3	45	使う	5	0	5
6	眠る	43	18	25	26	ておく	8	1	7	46	暑い	5	3	2
7	まま	33	15	18	27	ようだ	8	3	5	47	人	5	4	1
8	ない	27	15	12	28	寒い	8	5	3	48	入る	5	3	2
9	閉める	25	14	11	29	間	8	3	5	49	無い	5	2	3
10	する	24	12	12	30	わかる	7	3	4	50	冷たい	5	3	2
11	寝る	23	12	11	31	空気	7	4	3	51	しばらく	4	2	2
12	てしまう	21	4	17	32	結果	7	4	3	52	ずっと	4	0	4
13	文	20	8	12	33	思う	7	2	5	53	そうだ	4	0	4
14	っぱなし	16	8	8	34	体	7	4	3	54	てくる	4	1	3
15	季節	16	5	11	35	冷える	7	4	3	55	イメージ	4	1	3
16	原因	12	3	9	36	かもしれない	6	4	2	56	温度	4	1	3
17	時間帯	12	5	7	37	現在	6	2	4	57	過去	4	2	2
18	なる	11	4	7	38	長時間	6	2	4	58	時間	4	3	1
19	開く	11	4	7	39	うっかり	5	2	3	59	全開	4	2	2
20	感じる	11	4	7	40	せい	5	5	0	60	風	4	3	1

両群には風邪をひいた主体の行為を示す構成要素と，主体を取り巻く状況を示す構成要素が共通している。上位群には主体を示す「人」と，その行為である「寝る」や窓の閉め忘れを表す「閉める」「忘れる」，主体自身の思考を表す「考える」が見られる。さらに，行為を打ち消す助動詞「ない」や，眠っていた時間や時間経過を説明する「時間」も行為描写の一部をなしている。アスペクト形式「ている」は主体による行為や動作の継続性のほか，窓の状態を表す。「する」は課題１同様，例文中の「開けっぱなしにして」部分の描写に用いられている。一方，下位群に見られる行為描写には「眠る」と「思う」があり，後者は主体の思考のほか，推測を含んだ形での情景描写がなされていることを示す。行為描写を示すアスペクト形式は下位群に多く，「てしまう」は寝たことや風邪をひいたこととその過失性を表す。また，「ておく」は主体が予め意図的にとった行為を表し，そうした行為の継続性を「ずっと」が表している。

主体の行為とは別に，事態の描写を示す構成要素も両群に共通する。上位群の「冷たい」

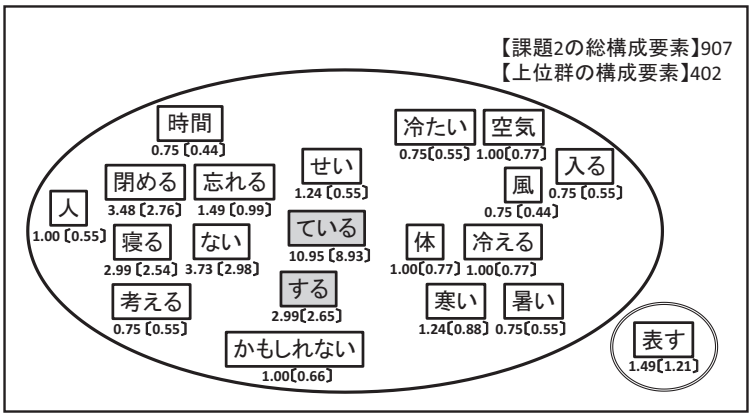

図３　上位群の例文分析記述に特徴的に見られる構成要素（例文分析課題２）

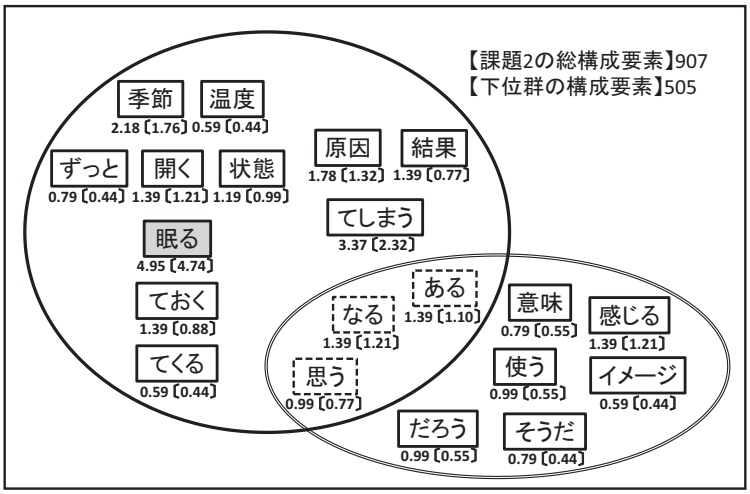

図４　下位群の例文分析記述に特徴的に見られる構成要素（例文分析課題２）

「入る」「冷える」は「空気」「風」「体」とともに，窓の閉め忘れに起因する事態や体調変化を表す。一方，下位群の「開く」「ずっと」「状態」は部屋や窓の様子を，アスペクト形式「てくる」は風の流入や気温変化を説明している。「なる」は気温や窓の状態変化のほか，因果関係の説明にも用いられている。このほか上位群の「寒い」「暑い」や下位群の「季節」「温度」は，気温や室温，時節といった外的環境を示す構成要素である。

さらに両群は，窓を閉め忘れての就寝と風邪の間にある因果関係にも言及している。上位群にのみ見られる「せい」は，原因および結果となる事態が好ましくないことをも示しており，下位群の「原因」「結果」は中立的で抽象的な説明となっている。

以上のほか，上位群のモダリティ形式「かもしれない」は，起こりうる主体の行為や状況，推測を含んだ形での事態描写である。また下位群の「ある」は，事態間の因果関係や主体の様子に関する描写に用いられている。

4.3　例文分析課題３での分析内容と使用された日本語表現

例文分析課題３（以下，課題３）は，例文「突然の出来事だったので私はパジャマを着たまま外へ飛び出していった」の分析を課した。テキストデータから得られた構成要素の総数（のべ数）は822個（上位群322個・下位群500個）で，閾値４以上の異なり構成要素は65個であった（表３）。

異なり構成要素それぞれについてその総数と総構成要素数822個との比率，さらに群ごとに異なり構成要素の数と構成要素の総数（上位群322・下位群500）の比率を調べ，各群において二つの比率に差のある20個の構成要素を抽出し[4]，内容の近さで語句を配置してまとめた（図５・６）。まず，例文中の「突然の出来事」の描写を示す構成要素が両群に見られ，上位群では「突然」「緊急事態」「何か」が該当する。下位群の場合は「出来事」「自然災害」「緊急」「何」が見られるが，このうち「自然災害」は「火事」「地震」を置換し統合した構成要素で，「何」は発生した事態の不明さへの言及である。こうした事態の発生した時間や時点については，上位群の「時間帯」と下位群の「時間」「過去」がそれぞれ示している。

表 3　例文分析課題 3 の異なり構成要素（閾値 4）

順位	構成要素	構成要素数			順位	構成要素	構成要素数			順位	構成要素	構成要素数		
		総数	上位	下位			総数	上位	下位			総数	上位	下位
1	外	58	20	38	23	何か	10	6	4	45	思う	6	3	3
2	パジャマ	54	22	32	24	する	9	5	4	46	普通	6	2	4
3	ている	46	15	31	25	火事	9	3	6	47	服	6	4	2
4	出る	38	14	24	26	自然災害	9	2	7	48	べきだ	5	2	3
5	ない	37	19	18	27	表す	9	3	6	49	よほど	5	2	3
6	着る	35	11	24	28	ようだ	8	5	3	50	意味	5	2	3
7	出来事	34	11	23	29	暇	8	4	4	51	過去	5	1	4
8	突然	30	13	17	30	状況	8	4	4	52	驚く	5	3	2
9	着がえる	28	15	13	31	普段	8	3	5	53	寝る	5	2	3
10	飛び出す	24	9	15	32	話者	8	1	7	54	履物	5	4	1
11	起きる	19	7	12	33	なければいけない	7	2	5	55	いる	4	2	2
12	文	19	8	11	34	緊急事態	7	4	3	56	すぐ	4	1	3
13	状態	18	7	11	35	時間	7	2	5	57	だろう	4	1	3
14	私	17	10	7	36	表現	7	1	6	58	てくる	4	0	4
15	時間帯	17	10	7	37	てしまう	6	1	5	59	イメージ	4	0	4
16	焦る	15	7	8	38	できる	6	0	6	60	何	4	1	3
17	無い	15	6	9	39	わかる	6	1	5	61	緊急	4	1	3
18	まま	14	4	10	40	パジャマ姿	6	5	1	62	使う	4	1	3
19	ていく	13	5	8	41	感じる	6	2	4	63	時制	4	1	3
20	家	11	4	7	42	急ぐ	6	2	4	64	忘れる	4	1	3
21	中	11	2	9	43	考える	6	3	3	65	履く	4	3	1
22	ある	10	6	4	44	行く	6	2	4					

さらに両群は，「突然の出来事」を受けた主体とその行為を描写している。上位群には，例文中の「私」とその行為である「着がえる」「履く」「焦る」「驚く」「考える」「する」，さらに行為の対象物となる「履物」「服」「パジャマ」が見られる。「パジャマ姿」は，例文の「パジャマを着たまま」部分を端的に描写している。また助動詞「ない」は，「着がえる」「出る」「履く」といった行為の打ち消しである。このほか「暇」は突発した事態に対処する時間的余裕を示しており，「状況」「ある」は発生した事態や主体の置かれた状況の描写である。一方の下位群には，主体を示す「話者」と，その行為として「着る」「出る」「すぐ」のほか，パジャマ姿であることを失念していることを示す「忘れる」，主体の心情や置かれた状況について判断できることを説明する「わかる」が見られる。また「できる」は助動詞「ない」を伴ってある行為が意思どおりに叶わなかったことの描写に用いられている。下位

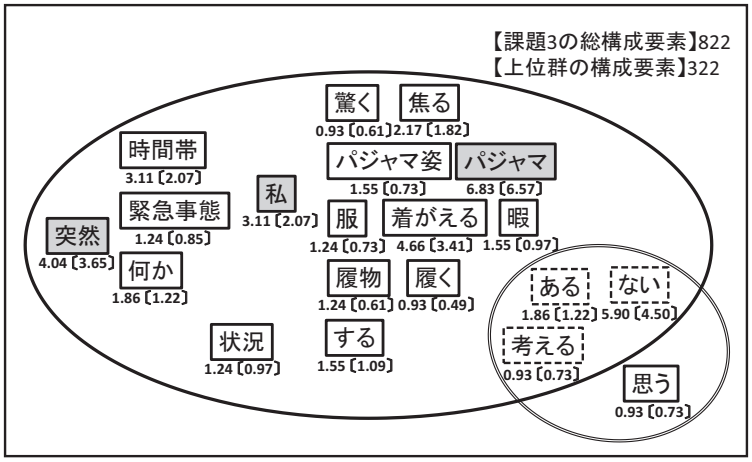

図 5　上位群の例文分析記述に特徴的に見られる構成要素（例文分析課題 3）

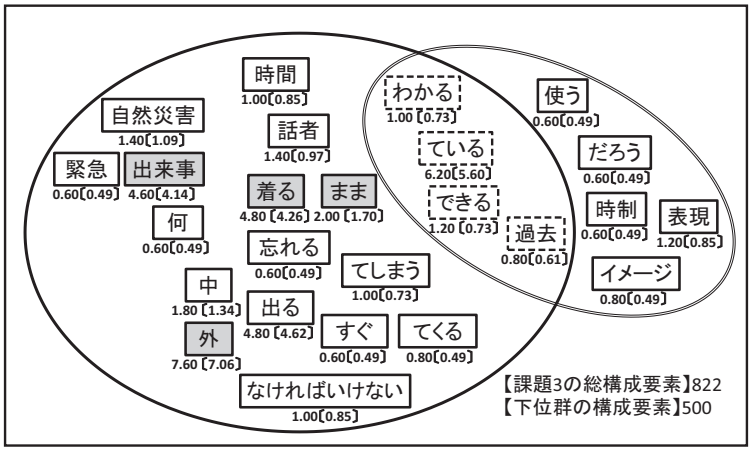

図６　下位群の例文分析記述に特徴的に見られる構成要素（例文分析課題３）

群にのみ見られるアスペクト形式「ている」「てくる」「てしまう」と例文中の「まま」も行為描写に用いられている。具体的に，「てくる」は主体の飛び出す行為を，「てしまう」は飛び出しや着忘れといった行為の過失性を，そして「ている」は主体の状態や行為の継続性をそれぞれ描写している。このほか行為描写に関わる構成要素として，「中」「外」が主体の居場所や飛び出す先を示し，「時間」は時刻のほかに着替えや準備の時間を示す。

4.4　例文分析課題４での分析内容と使用された日本語表現

例文分析課題４（以下，課題４）は，例文「電車の中で立ったまま寝る人もいる」の分析を課した。テキストデータから得られた構成要素の総数（のべ数）は1007個（上位群432個・下位群575個）で，抽出できた閾値４以上の異なり構成要素は66個であった（表４）。

表４　例文分析課題４の異なり構成要素（閾値４）

順位	構成要素	構成要素数			順位	構成要素	構成要素数			順位	構成要素	構成要素数		
		総数	上位	下位			総数	上位	下位			総数	上位	下位
1	寝る	106	47	59	23	状況	8	2	6	45	行為	5	2	3
2	人	93	43	50	24	表す	8	3	5	46	場所	5	1	4
3	ている	92	49	43	25	感じる	7	4	3	47	たい	4	0	4
4	立つ	89	39	50	26	座席	7	4	3	48	だろう	4	0	4
5	電車	47	16	31	27	時制	7	0	7	49	っぱなし	4	0	4
6	ない	44	20	24	28	多い	7	2	5	50	なる	4	1	3
7	まま	43	18	25	29	珍しい	7	4	3	51	わけではない	4	2	2
8	いる	42	16	26	30	動詞	7	0	7	52	意味	4	0	4
9	中	42	13	29	31	眠る	7	2	5	53	一般的	4	1	3
10	座る	30	15	15	32	つかまる	6	4	2	54	何か	4	1	3
11	状態	23	7	16	33	もたれる	6	4	2	55	器用	4	3	1
12	する	16	6	10	34	横になる	6	1	5	56	帰宅	4	2	2
13	ある	14	9	5	35	思う	6	2	4	57	見る	4	3	1
14	できる	14	3	11	36	時間帯	6	4	2	58	現在	4	1	3
15	疲れる	14	6	8	37	時刻	6	6	0	59	個数	4	3	1
16	文	13	6	7	38	眠い	6	2	4	60	考える	4	2	2
17	普通	12	6	6	39	無い	6	4	2	61	場合	4	3	1
18	話者	11	7	4	40	いろいろ	5	2	3	62	睡眠不足	4	2	2
19	ようだ	9	1	8	41	かもしれない	5	1	4	63	続く	4	0	4
20	吊り革	9	5	4	42	ものだ	5	1	4	64	動作	4	4	0
21	てしまう	8	0	8	43	起きる	5	4	1	65	服装	4	4	0
22	乗る	8	6	2	44	行なう	5	3	2	66	本当	4	4	0

異なり構成要素それぞれの総数と総構成要素数1007個との比率，さらに群ごとに異なり構成要素の数と構成要素の総数（上位群432個・下位群575個）の比率を調べた。そして，各群において二つの比率に差のある構成要素20個を抽出し，内容の近さから配置してまとめた（図７・８）。両群の例文分析には，電車内での乗客の行為や動作を描写する構成要素が見られる。上位群では「乗る」「座る」「つかまる」「もたれる」「起きる」「見る」が該当し，このうち「起きる」は「立ったまま寝る」乗客との対比である。このほか「動作」は主体の動きを抽象化した表現で，アスペクト形式「ている」は乗客の状態や行為の継続性を説明している。対する下位群の行為描写は，「っぱなし」と寝る体勢を示す「横になる」が見られる。アスペクト形式「てしまう」は寝る行為の反意思性への言及であり，「本当」は主体の行為や様子が事実であることへの言及である。一方で，こうした行為の描写とは別に，下位群は状態性に着目して描写しており，先に挙げた「ている」に加え主体の状態とその継続性

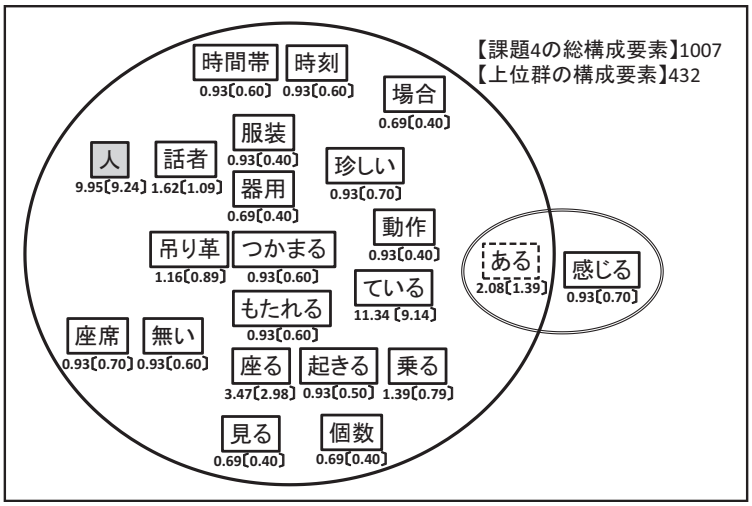

図７　上位群の例文分析記述に特徴的に見られる構成要素（例文分析課題４）

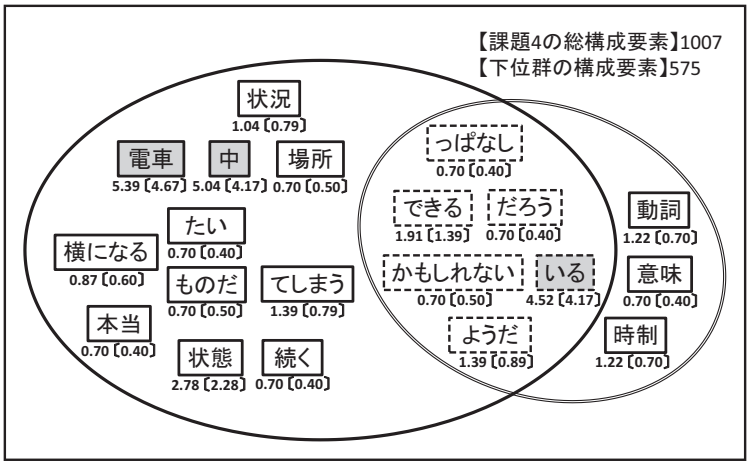

図８　下位群の例文分析記述に特徴的に見られる構成要素（例文分析課題４）

を示す「状態」「続く」や，立ったまま寝る人を含めた乗客の存在を示す「いる」，立って寝られることを描写する「できる」などが見られる。

主体とその行為を取り巻く場面的文脈として，電車と車内の様子を描写する構成要素も両群に見られる。上位群の「座席」「吊り革」「無い」と下位群の「電車」「中」「場所」が該当し，このうち「無い」は空席などの不足を説明している。また下位群の「状況」は，立って寝る主体の置かれた状況を示す。こうした空間的な文脈とは別に，「時刻」「時間帯」など，事態発生の時間的文脈にも上位群は言及している。

行為主体である乗客を示す構成要素は上位群に多く見られ，「話者」は例文の発話者を，「人」は話者を含めた乗客を示す。また，「スーツ」「制服」を統合した構成要素「服装」や「器用」が人物描写であるほか，「珍しい」は立ったまま寝る人やその行為への言及である。一方で，モダリティ形式は下位群に多い。乗客の願望を示す「たい」，推測を交えた形での情景描写を示す「だろう」「かもしれない」，寝る行為の本来のあり方を説明する「ものだ」は，それぞれ行為主体の描写に用いられている。また「ようだ」は行為主体に関する推測的な描写や比喩による描写を示す。以上のほか，上位群の「ある」「個数」は情景描写に用いられているが，実質的な意味が希薄でそれ自体では特別な意味を把握しにくいものである。

4.5　例文分析に見られたメタ言語

メタ言語としての構成要素は，例文の言語的側面に関する説明と，例文分析行為のメタ的な叙述に大別できる。言語的側面に関しては，例文や類義表現などを示す「文」「言葉」「表現」が下位群に見られる（課題１・３）。また，上位群の課題１と下位群の２・４にある「意味」や上位群の２に見られる「表す」は，文意や語義の説明である。文法的特徴や用法の説明については，下位群の課題３と４にある「動詞」「時制」「過去」や，課題１から３にある「使う」が該当する。上位群１と下位群３・４の「できる」は文意の解釈や用法の可能性への言及である。一方，分析行為のメタ的な叙述には，「考える」（上位群３と下位群１）や「思う」（上位群３と下位群１・２），「わかる」（下位群３）などの思考動詞が該当する。また，両群にある「イメージ」「感じる」や上位群の「受ける」（課題１）は，直感的な分析がなされていることを示す。「ある」（上位群の課題１・３・４と下位群の２）は，「イメージ」「ニュアンス」「可能性」「感じ」などと共起して，語義説明や分析者の推測を表す。下位群に見られるモダリティ形式「だろう」「かもしれない」「そうだ」「ようだ」も推測に関わり，「ようだ」は比喩にも用いられている。以上のほか，上位群の課題３の「ない」や下位群の２の「なる」，４の「いる」は，意味や文法特徴，用法に関する説明の一部である。

５．考察

四つの例文分析課題に見られた特徴的な構成要素からは，例文に関する描写の内容と手続きが上位群と下位群で異なることがわかる。そうした異なりの第一は，描写内容の具体性に見られる。上位群の構成要素には，具体的な行為や動作，事物，場面を示す語句が多い。特に，課題１では部屋の状態に関与する主体とその行為が，課題４では乗客の特徴や行為がそれぞれ詳述されている。一方の下位群は，具体的内容を表す語句が全課題を通して相対的に

少ない。また，課題２の「原因」「結果」や課題２と４における「状態」など，抽象的な語の使用も見られる。課題３での「突然の出来事」に関する描写は下位群のほうが詳細に説明しているが，総じて，各群に特徴的なものとして抽出された構成要素は具体性に差が認められる。

第二に，例文が表わす事がらの捉え方が両群で異なっている。類義表現対「っぱなし／まま」は状態の持続を表すが，上位群は例文の表す事態における主体とその行為や動作を中心に描写しており，事態の動的側面に焦点化する傾向にある。一方，下位群は事物の状態を中心に描写しており，静的側面に焦点化する傾向が窺える。例えば課題１の場合，上位群には「片づける」「整理整頓」「散らかす」「放置」など意思的行為を示す構成要素が目立つのに対し，下位群には「きれい」「散らかる」など部屋の状態を示す語が多く見られる。他の３課題でも，上位群は場面的文脈と併せて主体とその行為を詳述していることが構成要素から把握できる。また，下位群の課題２と４に見られる「状態」は，静的な描写であることに加え，例文分析が抽象的であることを強く示唆する構成要素である。

第三に，静的描写の傾向が見られる下位群だが，行為や動作に関わるアスペクト形式の使用は４課題を通じて上位群より多い。課題２の「ておく」は主体の意図的行為を表し，３課題に見られる「てしまう」は意図や期待に反した行為を表している。一方で，課題１における上位群の「てある」と下位群の「ている」は事物の様子を描写しているが，前者は主体の関与を示唆し，後者は状態描写に用いられている。この点で，上位群の動的描写の傾向と下位群の静的描写の傾向がアスペクト形式の使用にも窺える。以上のように，下位群は動作や行為のアスペクト的側面を詳述しているが，それに比して動作や行為そのものの描写は詳細とは言いがたい。また，アスペクト形式は抽象的で意味内容が把握しにくいため，この点が例文分析の抽象さに関わっている可能性も考えられる。

第四に，以上で指摘した両群の例文分析の傾向は，構成要素からの例文分析内容の把握や，情景想起のしやすさにつながる。上位群の場合，抽出された構成要素からストーリー性のある内容や情景が容易に想起できる。例えば課題２の場合，窓を閉め忘れて寝たことや夜気が入り込んで体が冷えたことなど，風邪をひくに至った経緯が構成要素から明確に把握できる。加えて，そうした因果関係のマイナス評価性も「忘れる」や「せい」で端的に理解できる。また課題３も，突発的事態で時間的余裕がないため着替えず飛び出した様子が順を追って明確に把握できる。一方の下位群は４課題を通して，例文の表す事態や情景，それらのストーリー性などが抽出された構成要素からは見出しにくい。下位群に特徴的な構成要素は全体的に抽象性が高く，主体やその行為，場面的文脈などが不明瞭で情景を具体的に想起することが難しい。

情景やストーリーの把握しやすさには，例文に関する描写方法の違いも関わっていると考えられる。上位群の場合，各課題の構成要素は内容からいくつかのチャンクにまとめることが容易である。これは，背景的事象も言語化しつつ，例文の字義通りの内容や構成に沿って事態や事象を個別的に詳述していることによるのだろう。この点で，上位群の描写はボトムアップ型といえる。一方の下位群は，例文の内容を意訳的に捉えるトップダウン型の描写である。そのため，個別的に詳述される事がらが相対的に少なく，抽出された構成要素は内容的なチャンクにまとめにくい。以上のような描写方法の違いは例文分析の内容や情報量に反

映し，結果として類義表現分析の手がかりの得やすさを左右しうる。

最後に，メタ言語の使用傾向から，例文分析において言語的側面に焦点化するという下位群の傾向が指摘できる。例文や類義表現の言語的特徴への言及は例文の意味内容への焦点化を相対的に弱め，例文が表す事態や事象の言語化が不十分なものになりうる。こうした例文分析では，例文描写における類義表現の使用と併せ，類義表現対の類似性を強調したり例文分析の焦点を曖昧化したりする可能性がある。

6．まとめと今後の課題

本研究は，類義表現分析の結果から調査協力者45名を上位群と下位群に分け，用いられた日本語表現から各群の例文分析の特徴を探った。両群の例文分析は内容の具体性と描写方法に異なりが見られ，類義表現分析に成功している上位群は主体の行為などの動的側面に焦点化し，ボトムアップで例文内容を具体的に描写する傾向がある。一方，類義表現分析の不十分な下位群は事物の状態など静的側面に焦点化し，抽象的な描写を行う傾向がある。また，例文や類義表現の言語的側面への言及も多い。以上のような相違点が例文分析の情報量や詳細さに影響し，さらには類義表現分析に影響した可能性がある。

しかし，本研究は調査対象者も，テキストデータから抽出できた構成要素も少ない。そうしたなかで例文分析の特徴の把握を試みたことから，低頻度の構成要素も分析対象に含まれていた。そのため，本研究で指摘した例文分析の特徴や傾向は，あくまで小さなものである。テキストデータをさらに収集し，本研究の成果を基に例文分析の特徴を明確化していく必要がある。また，構成要素の処理方法にも検討の余地がある。本研究で分析した構成要素には，指示内容の不明瞭な語や実質的意味の希薄な語も見られた。また，低頻度の構成要素にも類義表現分析に資するものがある。例文分析の内容とその特徴を精確に把握できるよう，構成要素の統合や定型的表現の構成要素化など，データのリファイン方法を改めて検討する必要もある。

以上のほか，上位群に見られた具体的描写や動的側面への焦点化が類義表現分析を成功に導く過程や要因については，本研究では明らかにできていない。例文分析記述とそこから得られる構成要素は類義表現分析にとって暗示的であり，そのままでは抽象的な意味特徴とならない。例文分析におけるボトムアップ型の具体的な動的描写と，類義表現の意味特徴との距離を埋める分析技術の解明が求められる。

日本語指導における効果的な例文利用を考えるとき，例文の分析や理解を学習者任せにせず，そこへ教師が積極的に関与することも重要である。本研究の成果からは，日本語の分析において例文が表す事象や事態を言語化することの価値が見出せる。そして，例文について具体的かつ詳細に描写する技術は，日本語分析技術の熟達度の低い初心者教師にとって優先的に修得や向上を目指すべきものだろう。本研究の成果は，日本語分析における例文活用を考える一助となるはずである。

注

1）石橋によると，同書は学習者や教師のニーズへの対応を想定した「例文リソース」で，「学生から中高年までの幅広い層」の日本語母語話者が作成した「中上級の日本語表現文型の例文集」である。よって，本研究で選定した例文は調査協力者にとって自然な文で，自作例文の分析と手続き上の異なりは生じないと判断した。
2）「構成要素」は，テキストデータに分かち書き処理を施して区切られた，一つひとつのことばである。
3）調査で扱った類義表現対「っぱなし／まま」は上級日本語指導で多く扱われる項目であることから，日本語教育経験者を評価者とした。評価に際しては，調査での各課題が日本語指導を前提としていない点に留意し，類義表現対の弁別的意味が明晰に説明されているかという観点でなされた。具体的には，「同じ状態が続いている」という両表現の共通意味よりも，「っぱなし」については放置もしくは放任という意味やマイナスの評価性が，「まま」については状態の不変化や維持，二つの状態の同時進行という意味が説明されていることを重視する。
4）構成要素総数に対する比率の同じ構成要素が複数あったため，下位群では抽出語が20を超えている。

付　記

本研究の調査にご協力くださった皆様に心より御礼申し上げます。なお，本研究の一部は，平成26～28年度日本学術振興会科学研究費助成事業・学術助成基金助成金［基盤Ｃ；課題番号26370601；研究代表者・坂口和寛］，および平成29年度日本学術振興会科学研究費助成事業・学術助成基金助成金［基盤Ｃ；課題番号17Ｋ02850；研究代表者・坂口和寛］の助成を受けて行われました。

引用文献・参考文献

岡本卓也（2005）「テキスト分析のためにデータを洗練する―大学イメージ調査への対応分析の適用」藤井美和・小杉孝司・李政元編『福祉・心理・看護のテキストマイニング入門』　中央法規出版
小山内洸（2010）「良い例文とは」『新英語教育』第489号　新英語教育研究会
鴻野豊子・高木美嘉（2016）『新人日本語教師のための授業づくり練習帖』　翔泳社
坂口和寛（2009）「日本語教師の日本語分析技術を養成するストラテジートレーニング―独習型教材の開発」小林ミナ・日比谷潤子編『日本語教育の過去・現在・未来 第５巻 文法』　凡人社
坂口和寛（2013）「日本語母語話者の類義語分析における正用例文分析の特徴と問題点―『映像化ストラテジー』による例文分析について」『信州大学国際交流センター電子紀要』（論文番号６）
坂口和寛・河野俊之（2015）「映像化ストラテジーにより類義語の正用文から想起される『映像』の特徴―日本語教育経験者の例文分析過程からわかること」『信州大学国際交流センター電子紀要』（論文番号10）
服部兼敏・鷲田万帆（2008）「学術的技術としてのテキストマイニング―その意義と看護における可能性」『看護研究』Vol.41，No. 3　医学書院

（2017年11月１日受理，11月20日掲載承認）